

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、東の方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河の国八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりて【なむ】、八橋といひける。その沢のほとりの木の陰に下り居て、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を上句に据ゑて、旅の心を詠め。」と言ひければ、詠める。

唐衣きつつなれにしましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふと詠めりければ、みな人、乾飯の上に涙落として ほとびにけり。行き行きて、駿河の国に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦・楓は茂り、もの心細く、すずるなるめを見ることと思ふに、修行者会ひたり。「かかる道は、いかでかいまする。」と言ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり  
富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとて【か】鹿の子まだらに雪の降るらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうに。【なむ】ありける。

なほ行き行きて、武蔵の国と下つ総の国との中にいと大きな川あり。それをすみだ河と言ふ。その河のほとりに群れ居て、思ひやれば、限りなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡し守、「はや舟に乗れ、日も暮れぬ。」と言ふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の、嘴と脚と赤き、嶋の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、

名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

- (1) ~~~アソの漢字の読みを、現代仮名遣いでそれぞれ答えなさい。
- (2) ①～⑥の語句の意味を答えなさい。
- (3) A・B・Cの係助詞に対応する結びの語をそれぞれ答えなさい。
- (4) X・Y・Zの「ぬ」のうち、他と用法の異なるものを一つ選び記号で答えなさい。
- (5) 次の文章の【ア】～【カ】に適切な語を入れなさい。

右の文章は【ア】からの引用である。【ア】のジャンルは【イ】である。同じ【イ】の作品には、他に【ウ】【エ】がある。

また、【ア】の主人公は【オ】と考えられている。この【オ】は【カ】の一人に数えられる。

(1) ア くもで    イ かわいい    ウ するが

エ つた・かえで    オ すぎようざ

カ さつき    キ ね    ク か    ケ ひえ

コ はたち    サ むさし    シ しもつふさ

ス はし    セ しぎ    ソ いお

(2) ① 美しく    ② ふやけてしまった

③ 思いがけないひどい    ④ 末日

⑤ 悲嘆し合っている    ⑥ 何となく悲しくて

(3) A ける    B らむ    C ける

(4) X

(5) ア 伊勢物語    イ 歌物語    ウ 平中物語

エ 大和物語    オ 在原業平    カ 六歌仙

(ウとエは順不同)